

89 誌上発表

『意心流百病指南』について

岩田源太郎

日本鍼灸研究会

九州大学附属図書館医学分館（イ・295）に所蔵される写本『意心流百病指南』（以下『百病指南』）は、江戸期の著名な鍼灸流派である西村流に関わりの深い、意心流の鍼灸書である。今日、江戸期に隆盛した各流派の鍼灸のことはあまり知られていない。よって、本書の内容を検討し、江戸期鍼灸研究の一助とする。テキストには『臨床実践鍼灸流儀書集成』（オリエント出版社）第4冊所収の影印本を使用した。

本書に序跋はない。全90葉からなるが、第24葉が落丁している。全体は二部に分かれ、前半は病門とそれに伴う主治穴が、後半は要穴や補瀉などが述べられている。前半の終わりに識語があり、後半の終わりにも二つ目の識語が入る。最初の識語には天明7年（1787）4月の日付と口授者とみられる沢田意心、撰者の西村元春、二世西村元教、三世西村元教、吉見軍治、吉原元和が連名され、最後に「飛田元甫殿」とあることから、伝承されてきた本書が飛田元甫に伝授されたものであることが判明する。第二の識語には三世西村元教、吉見軍治、吉原元和の3名のみが連名されている。これらのことから、本書の後半部分については、三世西村元教の時代に増補された可能性も考えられる。以上のことから、『百病指南』は西村流の中で伝承されてきた意心流の鍼灸を伝えたものであることがわかる。ちなみに『西村元春先生没後三百年記念式典記念誌』（1998年刊。以下『記念誌』）に典拠未詳の天明7年（1787）4月付西村家意心流免許皆伝の系譜が載せられているが、『百病指南』とこの免許皆伝の系譜に見える日付や識語の連名は同一であり、いずれも飛田元甫が最後の受伝者となっていることから、この系譜は『百病指南』の識語に基づくものとも考えられる。また『記念誌』では『常総古今の学と術と人』に見える西村元春の伝を引いて、西村元春の師である沢田意春は長崎の人で、明から渡来した鍼医に師事したとある。この沢田意春は本書の沢田意心と同一人物と見られる。すなわち、西村元春（1611～1698）の生没年から見て、意心流は江戸初期から前期に成立し、西村流の中で伝承され、現在の『百病指南』が最終的に成立あるいは伝授されたのは、江戸中期末の天明年間ということになる。

本書の病門は全112病門220項目（ただし前記した落丁のため第21門の内容を知ることはできない）、主治穴は239穴（うち阿是穴は18穴）で構成されている。病門は、病證名、病機、主治穴、刺法や施術上の注意の順に構成されている。また主治穴は常に取穴とあわせて記載されている。主治穴の表記の順序に規則性はない。だが、同じ病門内に、同じ穴名が数回出てきている箇所があることから、施術順に穴名を並べている可能性も推定される。施術量については、特に記載されていないが、「可立」や「灸セヨ」とあることから、鍼灸両方を用いていることがわかる。

本文中に書目や人名は殆ど見られず、僅かに書名は『素問』『難経』『医学正伝』の3書目、人名は「東垣」、「子和」、「丹溪」の3名に過ぎないが、『医学正伝』が比較的多く見られる。

意心流が西村流に与えた影響については、今後の検討課題とする。